

博士学位論文審査報告書

大学名 早稲田大学
研究科名 スポーツ科学研究科
申請者氏名 田邊 陽子
学位の種類 博士 (スポーツ科学)
論文題目 アンチ・ドーピング教育とスポーツの価値についての研究
A Study on Anti-Doping Education and Values of Sport

論文審査員 主査 早稲田大学教授 赤間 高雄 医学博士 (筑波大学)
副査 早稲田大学教授 友添 秀則 博士 (人間科学) (早稲田大学)
副査 早稲田大学教授 坂本 静男 医学博士 (聖マリアンナ医科大学)

本博士学位論文は、アンチ・ドーピング教育をスポーツの価値に関する教育としてとりあげ、日本のトップのユースアスリート、および日本とイギリスのアスリートとコーチを対象として調査を行い、問題点を明らかにして今後のアンチ・ドーピング教育に必要な事項を提示している。

本博士学位論文は、第1章：序論、第2章：本研究の構成、第3章：第1回ユースオリンピック大会における日本代表アスリートの特性 (研究課題1)、第4章：日本とイギリスの柔道アスリートにおけるアンチ・ドーピングに関する意識調査 (研究課題2)、第5章：日本とイギリスの柔道コーチにおけるアンチ・ドーピングに関する意識調査 (研究課題3)、第6章：総括討論、第7章：結語、で構成されている。

第1章：序論では、オリンピズムと嘉納治五郎のスポーツを通じた人間教育についてまとめ、スポーツにおけるドーピングの歴史と変遷、アンチ・ドーピング活動におけるアンチ・ドーピング教育の重要性について整理されている。また、競技だけではなく、オリンピック教育や文化交流が重視されているユースオリンピック競技大会についても解説している。第3章 (研究課題1) では、第1回ユースオリンピック大会日本代表アスリート57名を対象にしたアンケート調査が行われ、スポーツがアスリートに与える影響が解析された。アスリートがスポーツから得られる満足感については男女間に質的な差がみられたが、アスリートがスポーツから得られる満足感に関して影響力のある人はコーチであることが確認された。このことから、アスリートのアンチ・ドーピング教育においても、コーチによる直接的な指導が重要であることが示唆されている。この調査は、本申請者が日本オリンピック委員会アスリート委員として活動していることから実施できたものであり、多競技の日本代表ユースアスリートの特性という貴重なデータが収集されている。この結果は、Yoko Tanabe, Shin Asakawa, Yuko Arakida, Ichiro Kono, Takao Akama, Characteristics of the Japanese National Team of the First Youth Olympic Games. J Sports Med Doping Stud 5(2): 156, 2015.として掲載されている。

第4章(研究課題2)では、アスリートのアンチ・ドーピングに関する意識と認識について異なる国間の比較が行われ、アンチ・ドーピング教育に必要な要素が明らかにされている。日本の柔道アスリート83名とイギリスの柔道アスリート43名を対象として実施され、イギリスの柔道アスリートではドーピングの是非について意見が二分されたが、多くの者がドーピングは柔道の価値を損なうと考えていた。他方、日本の柔道アスリートはドーピングの是非については否定的な意見が多かったが、ドーピングが柔道の価値を損なうか否かに関しては回答が分散していた。柔道(スポーツ)におけるフェアな戦いについての認識と柔道(スポーツ)の価値についての認識に日本とイギリスとで差があることと、両国のアスリートとも認識が十分ではないことが示されている。アンチ・ドーピング教育においては、スポーツのフェアとスポーツの価値に関する理解を深めるために、その国の文化的背景をも考慮して、その国に適した教育プログラムが必要であることが明らかにされた。

アスリートのアンチ・ドーピング教育においては、第3章(研究課題1)によってコーチの直接指導が重要であることが示唆され、第4章(研究課題2)によって日本とイギリスではアスリートの理解度や認識度の特徴が異なることが示された。そこで、第5章(研究課題3)では日本とイギリスの柔道コーチのアンチ・ドーピングに関する理解と認識が調査された。日本の全柔連認定コーチ有資格者66名とイギリスの柔道連盟認定コーチ有資格者74名が調査対象となった。ドーピングの是非については、アスリートの調査と同様に、イギリスの柔道コーチでは意見が二分されたが、日本の柔道コーチはほとんど否定的であった。また、両国とも柔道コーチの多くの者がドーピングは柔道の価値を損なうと考えていた。柔道(スポーツ)の価値についての認識は、アスリートよりも柔道経験年数の長いコーチで深まっている可能性が考察されている。

以上の研究成果から、アンチ・ドーピング教育において、アスリートは指導をうけるコーチの影響を強く受け、また、競技のフェアやスポーツの価値については国によって認識に特徴があることが明らかとされた。アンチ・ドーピング教育は、その国の倫理観や価値観に基づいて、アスリートやコーチに実施される必要があると総括された。

博士論文公開審査会においては、研究概要の発表の後、質疑応答が行われた。序論部分の参考文献の引用についての追加と表記の修正の指摘があった。また、第4章と第5章については、アンチ・ドーピング研修会受講経験群と非経験群に群分けを追加して考察を深めるほうがよいとの指摘があった。本研究の調査対象はユース日本代表や日本とイギリスの柔道アスリートと公認柔道コーチであり、これらの対象への調査は本申請者のスポーツ団体での活動と競技指導活動があるから実施可能であり、貴重な調査として評価できるとの意見があった。これら審査会での指摘に基づいて修正が行われ、審査員の確認のうえ、最終論文として提出された。

以上の審査結果により、本申請者は、博士(スポーツ科学)の学位を授与するに十分値するものと認める。

【本博士学位論文に関する原著論文】

Yoko Tanabe, Shin Asakawa, Yuko Arakida, Ichiro Kono, Takao Akama, Characteristics of the Japanese National Team of the First Youth Olympic Games. J Sports Med Doping Stud 5(2): 156, 2015.

以上

